

カトリック

広島教区報

No. 137

カトリック
広島司教区

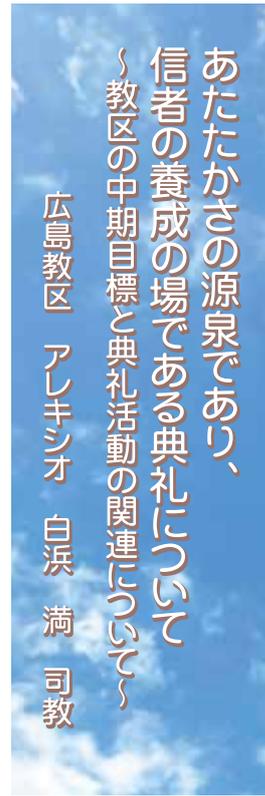
発行責任者
広報担当
瀧井英昭神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区鞆町 4-42
広島司教区内
TEL (082) 221-6017

司教メッセージ・じゃけえのう・平和行事
教区の動き
J-CaRM広島便り
ダイヤモンド祝 深堀神父にインタビュー
地区便り・海峡からの風・青少年・ひと粒

1〜3面
4〜6面
7面
8〜9面
10〜12面



あたたかさの源泉であり、
信者の養成の場である典礼について
教区の中期目標と典礼活動の関連について

広島教区 アレキシオ 白浜 満 司教

はじめに

今年も間もなく、日本の教会において、8月の平和旬間（8月6日〜15日）を迎えます。毎年、教区の平和行事の準備をしてくださっている「平和行事実行委員会」の委員をはじめ、ご協力くださる関係者の方々、参加してくださる皆



白浜司教（三次教会 司牧訪問）

様に、改めて心から感謝申し上げます。今年も、どうぞ、よろしくお願いいたします。今年6月に赴任された新しいローマ教皇庁日本大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教様も、8月5日の平和祈願ミサに初めて参列して、わたしたちと祈りを共にしてくださいます。また、昨年引き続き、米国サンタ・フェ大司教区のジョン・C・ウエスター大司教様が来日され、8月5日の平和行事の講演の中で、世界のカトリック教会に向けて、「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」構築の呼びかけをされる予定です

す。今年の平和行事を通して、平和の実現のために国籍や教区等を越えて「ともに歩む」心構えを新たにしていきたいと思えます。

宣教師の中期目標と典礼活動

広島教区は、「2020教区代表者会議」（2021年〜2022年開催）の提言に基づいて、新たな歩みを開始しています。その大きな一つの柱は（前回の教区報でも触れた）教区の宣教師の長期・中期の目標です。とくに3年間（2024年度〜2026年度）の「あたたかさの源泉に立ち帰る」（典礼活動）という中期目標に関連する取り組み



「じゃけえのう」
とは広島弁で「だからね!」という意味。

今年の四月、「カリタス広島」が発足しました。実は、「カリタス広島ってなに?」って声をよく聞きます。募金でおなじみのカリタスジャパンとは、親子のような関係ですが、あくまでも広島教区で活動する団体です。

『カリタス=愛のわざ』教会内外で活動しているボランティア団体を繋ぎ、ハブの役割を果たします。ボランティアリストを2年前から平和の使徒推進本部のホームページで公開しておりましたが、今後はカリタス広島ホームページに引越し、さらに多くの活動団体に登録していただき、それを見たみなさんが、活動に協力・参加いただけることを目指しています。教会のボランティア活動は、イエス様の愛を社会で実践する強力な宣教活動です。ともに歩むあたたかさのある教会をめざしていきましょう!

もうひとつ大きな柱となる活動は、災害サポートです。近年毎年のように全国各地で自然災害が発生しています。実際、教区内でも大きな災害に見舞われた地域がたくさんあります。災害は、いつどこで起こるか、誰も予想が出来ません。これからは、災害に備えることも重要になっていきます。カリタス広島では、「災害対策パイロット小教区」を、各地区に設置することを目標としています。現在、備蓄品とボランティア活動に使用する備品を保管いただける小教区を募集しています。地区内で災害が起こった場合、出来るだけ早期に対応できる環境を整えたいと思っています。災害時は教会だけでなく、地域とのつながりも重要になってきます。他人事ではなく、自分事として取り組むことも大切です。『なんかがおこってからは、じゃあ、おそいんよ。』（カリタス広島和田里真弓）

みが、それぞれの教会共同体において検討されていることでしょう。後日、教区の典礼委員会でも話し合いの機会を設けて、皆様に具体的な取り組みの提案をさせていたいただきたいと思えます。ここでは、中期目標と典礼活動（ミサ・諸秘跡等）のつながりを確認したいと思えます。

あたたかさの源泉

ヨハネの手紙の中に、「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」（同4・10）という、みことばがあります。あらゆる教会活動の力の源泉は、言うまでもなく「愛である神」（1ヨハネ4・8）です。

そして、教会の典礼は、父である神が、御子イエス・キリストを通して成し遂げてくださった、人間を罪から救うわざを記念し（ミサや諸秘跡等）、その恵みを人々に与え続けて行く活動です。そのために典礼活動は、教会活動の中で

重要な場を占めています。

教皇フランシスコの使徒的勧告『わたしは切に願っていた』

教皇フランシスコは、使徒的勧告『わたしは切に願っていた』（2023年11月公布）の中で、①この素晴らしい恵みの場である「典礼祭儀への参加によって、わたしたちはそれぞれの召命において養成される」（40番）と教えています。②しかし、「（典礼）祭儀は、キリストがわたしたちのうちに形づくられるまで働く聖霊のわざに従順である（ガラテア4・19）という、わたしたちの現実にかかわっている」（41番）ことも指摘しています。

典礼活動は、わたしたち信者が、聖霊による養成を受けることのできる恵みの場です。しかし、わたしたちのうちにキリストが形づくられるように働く聖霊に、わたしたち自身を委ねる必要があります。また、同時に、わたしたち一人ひとりが個人的にキリストと

一致するだけでなく、共同体としてキリストのからだになる場でもあることを心に留めたいと思います（41番参照）。このような意味で、教皇フランシスコは、教会の典礼が、「キリスト教霊性の第一の源泉であるもの」（61番）と教えています。

とくに教皇フランシスコは、使徒的勧告『わたしは切に願っていた』の中で、①典礼暦年と②主日の意味を再発見するよう、わたしたちに強く勧められています（63番参照）。以下に、教皇フランシスコの言葉を抜粋して紹介したいと思います。

①「典礼暦年」

教皇フランシスコは、次のように教えています。「わたしたちにとって典礼暦年は、キリストの神秘についての知識を深め、キリストの死と復活の神秘に自分の生活を浸し、キリストの栄光の再臨を待つためのものであることが分かります。これはまさに生涯養成です。わたしたちの人生は、次々と起こる無秩序な

出来事の連続ではありません。それはむしろ、イエス・キリストの死と復活を毎年祝うことによって、わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望むわたしたちを、キリストに一致させる確かな旅路なのです」（64番）。

わたしたちが毎年祝う典礼暦年を通して、キリスト者としてのわたしたちの生涯養成が続けられているのです。

②「主日の意味」

一年を通して繰り返される典礼暦年の中でも、「主日は、キリストの死と復活を祝う中核となる日ですが、その素晴らしいについて、教皇フランシスコは、次のように説明しています。「教会は、8日目ごとに、わたしたちの救いの出来事を主の日に祝います。日曜日を守るべき日である以前に、神がご自分の民のためにお造りになった贈り物です。だからこそ、教会規則でその贈り物を保護しています。毎週日曜日、復活した主のことばは、わた

したちの存在を照らし、神から遣わされた目的をわたしたちにおいて果たそうとします（イザヤ55・10～11参照）。毎週日曜日、分かち合い、もてなし、奉仕による兄弟的な交わりを通して、キリストの御からだと御血における交わりは、わたしたちの人生が御父に喜ばれるいけにえとなるよう願っているのです。毎週日曜日、裂かれたパンの力が、わたしたちの祭儀の真正さを明らかなものとする福音の告知において、わたしたちを支えるのです」（65番）。

こうして、8日目ごとに主日の感謝の祭儀（ミサ）を祝いながら、一年を周期として展開されて行く典礼暦年を通して、キリスト者としての生涯養成が続けられ、わたしたち自身が福音宣教に従事する働き手（福音の告知者）として成長していくことができるのです。

2024年は

「祈りの年」

教皇フランシスコは、

2025年の聖年の準備として、2024年を「祈りの年」と宣言しました(2024年1月21日)。

その意図について教皇は「個人の生活、教会生活、この世界で生きる中で、祈りの大きな価値と絶対的な必要性を再発見するための年になります」と説明しています。そして、福音宣教省から「わたしたちに祈りを教えてください」という冊子も出版されています。

わたしたち信者の生涯養成の場である典礼活動への意識的で積極的な参加のためには、日々の生活におけるわたしたちの個人的な祈りが、そのための素晴らしい準備となります。一日五分でも、祈りの習慣を身につけましょう。教区創立一〇〇周年を記念して発行された『信徒手帳』を、そのために活用していただければ幸いです。

結びに代えて

教会が行い続ける典礼活動(ミサや諸秘跡)を通して、わたしたちの生涯養成を実現させていただきさる御父

の働きが、「エフェソの信徒への手紙」の中に、素晴らしい要約されているように思います。このパウロのことばを紹介して、結びにしたいと思います。

「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。ま

た、あなたがたすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように」(エフェソ3・16)。

これこそが「あなたがたの源泉に帰る」ことです。

祈りの年のために (福音宣教省の冊子からの仮訳)

①取りなしの祈り

「父よ、いつくしみのうちに、あなたの子ともであるわたしたちの祈りを聞き入れてください。2025年の聖年に向かう歩みの中で、わたしたちの信仰を新たにし、わたしたちの希望と愛を成熟させ、この世において、あなたの愛を証しする者とならせてください。」

②賛美の祈り

「神よ、わたしたちはあなたの限りない愛をたたえます。わたしたちが待つ聖年において、あなたの被造物の美しさに、わたしたちの目を開かせてください。わたしたちの心が、あなたの偉大な業をたたえる喜びで満たされますように。」

③感謝の祈り

「神よ、わたしたちがいただいたすべての恵みと賜物のゆえに、あなたに感謝をささげます。この聖年の準備のときに、人生のあらゆる瞬間に差し伸べられているあなたのみ手の業をわたしたちに悟らせてください。

日々の生活の中で、あなたの愛といつくしみの賜物を感じ取ることができるよう。」

④願いの祈り

「あらゆる英知の源である神よ、近づく聖年の祝いに向けて準備し、祈りの年を過ごすわたしたちを導いてください。わたしたちがあなたいつくしみとゆるしの恵みを深く悟り、豊かに味わうことができるよう、わたしたちの心と思いを照らしてください。」

聖年の祈り

天にあられるわたしたちの父よ、あなたが遣わして下さった御子イエス・キリストへの信仰と愛の炎を、聖霊によってわたしたちの心に燃えさせたせ、わたしたちの中に、み国の到来への希望を呼び覚ましてください。

あなたの恵みがわたしたちを、福音の種を蒔く熱心な働き手に変容させ、人類と全世界に、新しい天と新しい地のおとずれを、信頼のうちに待ち望ませてください。そのとき、すべての悪の力が滅ぼされ、あなたの栄光が永遠に輝き出ます。

聖年の恵みが、希望の巡礼者一人ひとりのうちに、天の富への望みを強め、わたしたちの贖い主の喜びと平和を、全世界に、もたらすことができますように。

神よ、わたしたちの賛美と誉れを受け入れてください。

あなたは永遠にほめたたえられますように。

世々に至るまで、アーメン。

2024 平和行事 主な行事予定

8/5 (月)

- 13:00 ~ 13:50 広島被爆証言
深堀升治神父 (広島教区)
- 14:00 ~ 15:30 基調講演
「核兵器のない世界をめざして ともに歩もう」
サンタフェ大司教 ジョン・C・ウェスター
- 16:00 ~ 17:30 平和祈願ミサ
- 18:30 ~ 平和のための祈りの集い(テゼの祈り)
(日本聖公会 合同プログラム)
原爆供養塔前(平和記念公園内)

8/6 (火)

- 8:10 ~ 9:00 原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサ
- 10:00 ~ 12:00 カトリック学校企画
「善意の人に平和あれ」
松浦悟郎司教(名古屋教区)
- 18:00 ~
原爆犠牲者のためのスピリチュアルコンサート

8/9 (金)

- 11:00 ~ 「ながさき平和の日」
長崎原爆犠牲者追悼ミサ

*その他の行事はお知らせやポスターをご覧ください

教 区 の 動 き

2024年度（第1回） 広島司教区宣教司牧評議会開催

去る6月8日（土）、2024年度第1回広島司教区宣教司牧評議会（以下、教区宣司評）がリモート会議形式と併用で開催された。白浜司教、司祭、修道士、信徒の27人が出席した。会場の広島カトリック会館多目的ホールには出席評議員の大半が集い、4人がリモート接続して予定通り会議が行われた。

教区宣司評は、今回からまず白浜司教の聖書朗読（ヨハネ15・1〜5）、挨拶と祈りから始まり、次の報告を含む評議事項から始まった。まず平和の使徒推進本部の傘下の「シノドス対応調整チーム」からの報告、「広島司教区情報技術（IT）推進チーム」からの決議事項へと続いた。情報技術推進チームからの提案

は、予てから準備していた教区公式ホームページのリニューアルに向けての最終確認が行われ、評議員の承認を得ることができ、準備が整い次第、新しい教区公式ホームページの運用を開始することになった。（6月10日から運用開始）閲覧と情報検索が大幅に見やすくなったホームページを、是非、ご活用頂きたい。引き続き同チームから「ソーシャルメディアの利便に関する指針とガイドライン（教区職員用・聖職者用）」の制定についての提案が示された。これも予てから準備を進めており、司祭団への説明や意見収集を経た上で、今回、最終の確認が行われた。評議の結果、本指針とガイドラインは評議員の賛成多数により施行となった。会議中に質問があった一般信徒向けに

については、言論の自由や表現の自由などの観点から、今後、ルールブックのようなものを検討し準備する必要があるとのこと。

続いて、4月29日に行われた「宣教ひろば」の振り返りの報告があった。

（※「宣教ひろば」の報告

平和の使徒となろう



平和の使徒推進本部

は5頁を参照)

各所からの報告の後、白浜司教はカトリック中央協議会に提出する必要がある「広島教区シノドス『宣教ひろば』報告書」の内容について評議員の賛同を得た。続いて「カリタス広島

（災害サポートセンター含む）」について担当司祭の久保神父から報告と提案が示された。提案内容は、災害時に各地区で拠点となる「災害対策パイロット小教区」を準備していきたいとのこと。災害時に近隣住民の避難場所や救済物資配布、ボランティアベース等の設置などが主な役割。詳細は、別途、各地区・小教区に連絡すること。教区宣司評では今回の提案を了承した。

更に続いて「2025聖年（2024年12月24日〜2026年1月6日）」について白浜司教からバチカンからの概要について報告があった後、広島教区として関連行事を行いたいとの提案があった。詳細については、今後、各地区、各小教区に向けて情報発信される予定とのこと。

また白浜司教からは「核兵器のない世界のパートナーシップへの加盟」についての主旨が示された。今年度の平和行事にサンタフェ大司教区のウエスター大司教が来広された際、パート

ナーシップ加盟の呼びかけをされる。そこで今後、広島教区がこの呼びかけの母体になって活動していくことへの了解を得たいとのこと。教区宣司評ではこの提案について異議ないことを確認した。

更に白浜司教からは「PAXクリスティ広島（仮称）の設置」についての説明があった。PAXクリスティは世界規模（フランス発祥）の正義と平和を推進する信徒中心のボランティア団体で、PAXクリスティ韓国のメンバーが今年6月に来広され、被爆地である広島に活動の拠点を作って欲しいと要望があったとのこと。

教区宣司評の後半は、各地区・協働体・修道女連盟、平和の使徒推進本部・正義と平和推進デスク、平和行事実行委員会、青年活動企画室からの報告があった。

広島地区修道女連盟からは、今年4月に岡山鳥取地区修道女連盟から広島地区と合併したいと要望があ

り、その後、山口島根地区にも意向を確認した結果、三地区を合わせることを確認ができたとのこと。今後、広島地区の規約を改めて『広島教区修道女連盟（仮称）』にする予定とのこと。

青年活動企画室からは広島ユースデー「サビエル・フェスタ・2024」を11月4日に開催することのお知らせ、平和の使徒推進本部からは本年度から新たに「ラウダート・シ・デス

部）



第一回「宣教ひろば」開催

開催の概要

2020年教区代表者会議後に発出された司教書に基づき、2024年4月29日に第一回「宣教ひろば」が開催された。14年前に開催された第2回教区代表者会議以来、久しぶりに広島教区の全ての小教区から司祭、信徒、総勢105名が一堂に会する集いとなった。今回の「宣教ひろば」は、2年10月にローマで開催された「世界シノド

ク」を開設したことが報告された。

以上のことが話し合わせ、祈りと祝福のうちに3時間の教区宣司評を閉会した。

なお、次回（2024年度第2回）教区宣司評は、12月14日に開催予定。

本記事に関するご質問などは平和の使徒推進本部まで。（平和の使徒推進本部）

ス」について学び、その際実践された「霊における会話」を体験することを目的として行われた。

シスター弘田の講演

昨年10月にローマで開催された第16回世界代表司教会議（世界シノドス）に日本から参加された3名のうちの1人、シスター弘田しづえ（ベリス・メルセス宣教修道女会）から、実際にシノドスで行われた内容について講演があった。今回



シスター弘田しづえ

のシノドスの特徴は以下であった。

(1) 司教だけでなく、司祭、修道女、奉獻生活者、信徒も出席し、投票権を行使した。

(2) 結論を出すことを優先せず、弱い人を含めた全ての人と「ともに歩む」ことを大切に進められた。

(3) 10名程度のグループに分かれての「霊における会話」を繰り返す、聖霊の導きにより、一致したことを、一致できなかったことを識別するプロセスが採用された。

シスター弘田は講演の中

で、シノドスのプロセスを「非常に重要な出来事」と表現し、現実を本当に見るための包摂と耳を傾ける新しいあり方への「革命的な変化のプロセスであり、第一歩」であると解説した。これはシノドスの本質的な性格とカトリック教会の希望を表現している。意見が違っても共に歩き続け、聖霊に聴くことにおいて、皆が一致していること、シノドスの歩みの主役は聖霊である、という教皇フランシスコのメッセージは、私たちに新たな感覚を呼び覚ました。

「霊における会話」

の実践

シスター弘田の講演後、カトリック中央協議会シノドス特別チームの小西広志神父（東京教区）から「霊における会話」について説明があった。小西神父は、「霊における会話」とは祈ったことを分かち合うことであり、結論を出すことが目的ではなく、聖霊の導きに従うことが重要



講演を聞く参加者

であると述べた。小西神父の説明を受けた後、参加者は10のグループに分かれて、事前に養成を受けたファシリテーターの導きによつて「霊における会話」の実践を行った。今回のテーマは白浜司教から事前に出されていた「広島教区あるいはあなたの小教区が教会の本来の使命を果たすために、どのようにすればシノドスの教会（ともに歩む教会、あなたがたの教会）になつていくことができるか？」であった。まず全員でテーマについて沈黙のうちに祈り、その後、祈ったことを



小西広志神父

順番に一人3分で分かち合った。途中、1分間の沈黙の祈りや、みことばを全員で唱えることを挟みながら、第1周は自分の祈りについて、第2周は分かち合いで聞いた他者の祈りについて、第3周は全員の祈りについての分かち合いを行った。

小西神父の講話

グループに分かれての「霊における会話」が終わった後、再度集合し、小西神父による講話「霊における会話 その方法と目的」と題して、これから何のために小教区で「霊における会話」を行っていくのかについて神学的な側面からの講話があった。講話の中では、「霊における会話」が生まれた歴史的背景

や、それによって生み出される教会共同体としてのあり方について、司祭や信徒に対する鋭い警鐘が語られた。最後に「霊における会話」のこれからについて、失敗を恐れず「霊における会話」を進めること、同じテーマで沈黙の時間を大切にしながら祈ること、共同体の信頼の中で自分の祈りを披露すること、他者の祈りを受け入れる「多孔性」を持つべきことを強調され、講演を締めくくった。

最後に

白浜司教から講演くださったお二人、そして参加



**広島教区の長期・中期の宣教司牧目標を
掲示する垂れ幕について**

広島教区では、今年2024年4月から、「2020教区代表者会議」からの流れを受けて決定された長期（10年間）と中期（3年毎）の宣教司牧目標に基づいて、新しい歩みをスタートしました。この新しい歩みを意識していただくために、各小教区においては、長期と中期

した全員に謝意が示された。また「霊における会話」に実際に参加して、結論は一つではなく、多様であるとの印象を持ったと話された。最後に「あなたの中で、よい業を始めてくださった神が、それを完成させてくださいますように」という叙階式の言葉を引用し、参加者一人ひとりの中で神様が豊かな実を結ぼうとしていることを強く感じたと話された。最後にシノドスのための祈りを参加者全員で唱え、司教の祝福をいただいで第一回「宣教ひるば」を終えた。

の宣教司牧目標の掲示をお願いします。

広島教区では、そのための「垂れ幕」を作製し、注文された小教区へお届けを完了しました。祭壇の脇や、聖堂の入り口など、掲示の具体的な方法・場所は各小教区にお任せします。ただ、「みことば」ではないことに留意しましょう。

それぞれの小教区での具体的な活動については、司教書（要約版）「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」（2022年復活祭）で示されている「10のテーマ30のチャレンジ」を参考しながら、基本的な方針としては1年毎に目標設定（具体化）して頂きたいと願っていますので、小教区でのチャレンジを始めて頂きたいと思います。

長期：「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」
(2024年度～2033年度)
中期：「あたたかさの源泉に立ち帰る」
(2024年度～2026年度)
1年毎の短期目標（サブテーマ）は、各小教区において目標設定（具体化）する。



今こそ「滞日外国人向けの災害時の避難訓練」を開きましょう！

司牧者協議会で提案をしております、題記セミナーを小教区単位でぜひ開きませんか。

今年は元旦から能登地方ではマグニチュード8を超える大地震が発生しました。九州・中国地方でも、群発地震が多発しています。気象庁の調べによれば、4月16～22日の1週間に観測された地震活動は6,000回以上、その内、豊後水道だけで、人間は感じる事が出来ない、震度1程度の地震が2,079回発生しています。この現象は京都大学防災研究所の西川友章先生が研究をしておられる「スロースリップ」という地震で、地球のプレートが1秒に1cm位動く微細地震だそうです。この動きが限界に来ると、大地震になる危険が高いそうです。大災害の被害を最小にするには、相応の準備をしておくことです。

私たちがしておかなければならない事は、前触れのある今こそその避難訓練です。

次の様な項目などを検討していただき、^{それぞれ}夫々の地区に必要な外国人を対象とした訓練をぜひ実施していただきたく提案します。

準備・実施項目

1. 関係者の名簿作成（名前、住所、電話番号、メールアドレス等）
2. 連絡組織
3. 複数の避難先の設定（地区ハザードマップの活用）と各避難場所の責任者
4. 避難時各自が準備すべきもののリスト作成
5. 行政の協力も得て、対象者向けの避難訓練の実施。TVで放映された災害時の実態や避難説明会等は、参加者に災害時の現場感覚を認識してもらうのに役立つと思います。私は何本かを録画しておりますのでお貸しいたします。

以上に加えて各小教区の実態に合わせた項目を検討して、避難訓練をぜひ実施してもらいたいと思います。

転ばぬ先の杖です。後から後悔するより準備をしましょう。

日程が決まりましたら、山口島根地区センターの田中さんの方に日程を連絡してください。

J-CaRM広島 山口島根地区担当 藤本忠文



9月16日（月・祝）広島教区の日

- 場 所 カトリック徳山教会
周南市毛利町 1-6 TEL 0834-21-1604
- 日 程 12:30 ~ 受付
13:00 ~ 講演会「霊における会話」
講 師：シスター木村（援助修道会）
14:30 ~ ミサ 司式：白浜満司教
16:00 ~ 茶話会 プラチナ・ダイヤモンドお祝い会

館チャペルにて司教主式ミサに参加された。来年度予定の「韓国女子総長会」との合同研修会準備のためである。



ミサ後、白浜司教との懇談の様子

訪れ、広島司教
女子修道会の総
本に本部をおく
参加のため、日
霊性センター）
修会」（西日本
総長会総会・研
日、「日本女子
5月8日〜10

ダイヤモンド祝を迎えられた 深堀升治神父様にインタビュー

教区創立から41年後の1964年に叙階された深堀升治神父様が、今年3月20日に教区司祭初のダイヤモンド祝（60周年）を迎えられました。これを記念して、創立100周年の節目に叙階された伊藤正広神父様との特別対談をお届けします。



(左) 深堀神父と (右) 伊藤神父

伊藤神父…どのような幼少期を過ごされましたか？

深堀神父…先祖は明治初めに名古屋へ流配されたゲループの組頭の1人だったみたいです。その子孫として父親がいて農業を、母親は、神ノ島で網元をやっていたときいています。根っ

からのキリシタン家庭の中で育てられました。小学校2年生まで長崎にいたんですけど、父親の転勤で原爆の1年前に広島に移住したんです。

伊藤神父…広島で関わりがあった教会は幟町教会ですか？

深堀神父…そうですね、焼ける前の幟町教会です。ラサル神父様、クラインゾルゲ神父様、チースリク神父様たちの中で一年間過ごしたんですね。毎週日曜日はミサに行く。ミサに行かないという発想は全くなかった。親たちもミサに行かないで食卓につくような子供は家においてほしくないと言っていた。

伊藤神父…いつ頃神父になりたいと思われましたか？

深堀神父…幼稚園くらいの頃、母と話したことがあったんですよ。「僕はなんでこの家に生まれてきたのか」とって質問するところか。って質問するところか。言ったんです。「あなたを宿したときからずっと、男の子が生まれたら司祭になってほしいと祈っていたの」それが心に残っているんですよ。だけど初めて神父になりたいと思ったのは小学校卒業くらいのこと。神父になるために皆その頃から小神学校に行っていた。でも母親は「高校を卒業するまでは話に乗らない」とほったらかしにされていた。中学の卒業アルバムには「将来司祭になりたい」と書いた記憶があるんですけどね。高校卒業前に、アルペ神父様が長束修道院で選定の黙想を指導すると聞いて行ってみた。人生においてどう生きたいかという選定の黙想はきっかけにはなったと思

ますね。でもまだ朧月みたいな召し出しだった。ところが福岡に深堀仙右衛門という司教がいて、大神父にあたるんだけど、両親が相談しに行っているんですよ。司教様は萩原教区長様に話を決めてほしいと話されたので、萩原教区長様のところへ行くと「私と一緒に働く司祭になつてく

ださい。土を耕して根を張って仕事を司祭が必ずです」と言われた。初めて自分で納得できたんですよ。それで教区長様の推薦で教区司祭を目指そうということになったんですね。神学校4回生の春休み

いたんですよ。だからあの十字架は僕にとつては最終的な本当の意味での司祭職に召されることを決心した黙想の十字架なんですよ。あの十字架だけは心の中にいつも残っているんですよ。

伊藤神父…神学生時代の思い出は？

深堀神父…一番印象的なのは、同級生が5人いたんですけど、全部やめてしまつて、私一人になったんですよ。

伊藤神父…興味を持たれた科目はありましたか？

深堀神父…存在論をすごく大事にしました。JOCの研究も神父になるまでずっとやっていました。

伊藤神父…印象に残っている養成者の神父様は？

深堀神父…ネメシエギ神父様です。神父様の授業は黙想会みたいな、祈りの雰囲気だったですね。

伊藤神父：叙階式の中で床に伏してた時、何を思っていましたか？

深堀神父：それはね、ものすごく印象に残っている。ラテン語でプロストラチオと言っていますが、埋葬式を意味しているんですよ。一生懸命祈っていたのは「神父になつて大罪を犯すようなことがあるんだつたらこのまま息を引き取らせてください」一方で「一度でいいから、これは私のからだです」って言わせてください

「そればかり、連願を聴きながらね・・・」
伊藤神父：司祭になつて60年で一番嬉しかったことは？

深堀神父：一番嬉しかったこと：みんな嬉しいから：こればかりは嬉しいってあんまり考えたことない。

伊藤神父：司祭職として一番喜びを感じることは？

深堀神父：毎日毎日感じるのは、いつ召されるか分かる

りませんけれど、召されたままの想いを持ちながら息を引き取ればなと思えます。

伊藤神父：司祭になつて一番大変だったことは？

深堀神父：一番困つたのはね、一度主任司祭をやつた場所には二度と帰らないというしきたりがあつたんですよ。ところがどっこい、何回帰つたことか。ものすごく辛いんですよ。もうあの神父は二度と来てほしくない”と思うほどの傷をつけた人にとつて、また帰つていつたらね、あの人の霊性はどうなつちゃうんだらうと、合わせる顔がないよね。出来る限りそういう赴任をさせないようにしてほしいなと思えますけどね。でも頭の切り替えが良くなつたのは、本当にもう一度赦してもらつて、そこで司祭生活をさせてもらえるという心の広さを持った人がたくさんおられるということは有難いなということですよ。

伊藤神父：広島教区の歴代の司教との関わりで何か思い出などはありますか？

深堀神父：荻原教区長様には出発点として原点を植えてもらったような気がします。野口司教様は、ものすごく難しいことを頼んでも「これは私が責任をとりますから」と司教としての思いやりがあつたと思うんですね。一番迷惑をかけたのは三末司教様。同い年だから、こんなのが事務局長でそばにいて命令しにくかつたと思うんですね。一番のヒットは、広島教区の経済的なプログラムを賛成してくれてできたのが「共通金庫」なんです。良い時に三末司教様が判断してくれて今があるということ。

伊藤神父：いつも心がけていることは何ですか？

深堀神父：それはね、自分の動機付け。フィリピの信徒への手紙1・23。「この世にみなさんと一緒にいるべきなのか、あるいは去つて神のもとにいくべきな

のか」何か行動に移そうとするときに、パウロが言つた言葉がいつも心にあるんです。キリストと共にいるということは他のなによりも比べてはるかに良い。

伊藤神父：これからの司祭に望むことはなんですか？

深堀神父：特に広島教区の司祭がもっと大事にしないといけないと思うことは、ほとんど一匹狼でいるんですよ、だからもっと兄弟愛みたいな深い付き合いを築いていた方が良いかなと。

伊藤神父：最後に信徒の皆さまに何かメッセージがあればどうかよろしくお願いいたします。

深堀神父：いつも思うんですけどね、司祭が一番嬉しいプレゼントは何かと聞かれるなら、告解しに来

てくれることです。赦しの秘跡に携わるということに對してのプレゼントをください。こんなふつつかな欠点だらけの人をよくぞ支えてくださつて今があるんだなつて感謝してもきれないくらいに思いがしますね。本当に感謝でいっぱいどうぞ表していいか分からない。

伊藤神父：短い時間で、わずかな事しか聞く事ができませんでしたが、一つ一つの言葉に、重みを強く感じました。深堀神父様、司祭叙階60年、本当におめでとうございませう。これからもずっと、広島教区民を見守ってください。



深堀神父

地区便り

山口島根地区

*市民駅伝大会に参加

2月7日、宇部市ときわ公園で開催された市民駅伝大会に、宇部・北若山・高千帆の連合チーム「ともに走る教会」が参加し、見事に完走した。高齢化の中でメンバーが集まるのが危惧されたが、隠れた市民ランナーが名乗りを上げたり、駅伝ということで教会に戻った人がいたり、なかなかすばらしいチームができあがった。健闘及ばず順位はそれほどでもなかったが、連合チームの監督を



宇部・北若山・高千帆の連合チーム

務めた齋藤有恒さん

(宇部教会)は、

「3教会のメンバー

全員でチームが組めたので、既に大成功。全員が無事に走りきれたら大成功。皆で力を合わせてタスキをつなげられたらそれでもう十分です」と語る。来年に迫った教会統合に向けて、この駅伝が大きな弾みとなったことは間違いがない。

広島地区

*2024年度広島地区

召命祈りの集い

4月27日、向原教会で「2024年度広島地区召命祈りの集い」を開催しました。自動車や列車を乗り継いで召命を祈るために集まった司祭、修道者、信徒は百名を超えました。

本場に少ない信徒さんと猪口神父様が聖堂や設備お庭など時間をかけて整えてくださいました。他の教会からは椅子の不足分を持ち寄り、スピーカーをお借りし、力を合わせての実現となりました。

72 海峡からの風

下関労働教育センターだより

ラウダート・シの 呼びかけに応える

回勅『ラウダート・シ』の、私たち家族の共通の家としての地球を癒しなさい、という呼びかけにどのように応えていくのか。回勅が出されてからすでに10年ほどが経つが、少しずつ自分の中でその種は成長しているように感じる。コロナ禍で、どうしようもない岩と石だらけの土地を畑に変えられないかと穴を掘り始めた。3年ほどが経ち、今は作物が取れる畑、マリアの像に向かって祈れる素敵な場所へと姿を変えた。土に触れることの喜びを知った。

今年の4月に東京に出張した折に、以前から一度伺いたいと思っていた栃木県的那須にあるアジア学院を訪れることができた。私の友人が、数年前にアジア学院で働かれている方と結婚されてそこに移住してから、ときどきフェイスブックに載せているメッセージを見ながら、そこに何かがありそうな気がしていたのだ。その夫妻が歓待してくださった、アジア学院で過

ごした3日間はとても充実したものだった。アジア学院は、「共に生きる」をモットーにして作られたキリスト教精神に基づく農村指導者を養成する学校で、世界中から、特に現在はアフリカとアジアから多くの人々が派遣されて、ここで自然と共生するための農業方法を学びながら、自分たちの地域に戻って人々に仕えるリーダーとなるように養われていく。私は、ボランティアとして、農作業や食事作りに参加させていたのだが、たくさんの方の刺激を受けた。その友人が、学院の敷地の田畑や森を案内してくれながら、色々なことを分かちあってくれた。何よりも心に残っているのは、土に触れることを通じて彼女の霊性が変容したということだ。以前は、自分のイメージを「風」に喩えていたが、ある祈りのセッションで、「あなたの自分自身のイメージは何か」と問われ、自然に出てきた言葉が「土」であった。朽ちゆくものを受け入れながら、新しい命へと変えていく土。考えてみれば、聖書の中で、人間は土

から作られたと書かれているではないか。大地と友となるということはそういうことなのか、と思った。さて、私は昨年8月にフランスに行った時に、ある本に出会った。それはイグナチオが残してくれた祈りの仕方である「霊操」をラウダート・シをテーマにするものである。この本を使って、信徒の方たちに、自然と友となるエコロジの霊性を育むための黙想のプログラムを提供できないだろうか。広島教区の「ラウダート・シ」デスクの和田里さんに相談して、とりあえず自分たちでまずやってみようと、周防大島の美しい海と山に囲まれた祈りの家を舞台に黙想をしてみた。自然に恵みに浴し、大自然と共に神を賛美する時間。今回はここまで。そこから、人間の罪を見つめ、回心の道へと進んでいく。これから、「ラウダート・シ」デスクと共に、この黙想を希望する方々と体験しながら、ラウダート・シの霊性を養っていきたいと願っている。

(中井淳神父)

バート神父様の講話からは、ひたむきな司祭への憧れが伝わってきました。少年の頃からの志をじっと胸に秘め、ついにご両親のサポートを得て、司祭叙階へと夢を実現されました。これからも成長、進化していきたいと講話を締められました。

ロザリオの祈り、講話に続き司教様司式のミサが7名の神父様方と共に捧げられました。参加者から「召命に皆が心を合わせて祈る姿に、信者になってよかった！と感動した。」という感想も寄せられました。この全過程を神に感謝！



バート神父

*エリザベト音楽大学の学生とベトナムのカトリック青年の文化交流会

2024年6月23日



参加者一同 (聖母幼稚園ホール)

(日) 聖母幼稚園ホールでベトナム青年約120名とエリザベト音大生25名の文化交流コンサートを行いました。ベトナム青年が前日のから作ってくださったベトナム料理を囲み食材の説明から始まりました。音大生は浴衣姿で参加し、ピアノ、声楽、箏、管楽器での演奏と炭坑節と踊りの説明の後、参加者全員で輪になって炭坑節を踊りました。

ベトナム青年からはベトナムのいろんな地域の歌と民族踊りの紹介、音大生も混じっての民族衣装ファッションショー、ベトナムの

お菓子も配られ、最後にみんなで竹を使つてのバンブーダンスを楽しみました。お互いたたえ合うほほえましい素晴らしい文化交流になりました。みなさんありがとうございました。

岡山鳥取地区

*聖書体験 in 笠岡教会

岡山鳥取地区青年連合の2024年度最初の活動を、5月25日に行いました。昨年度に行った陶芸体験に続いて2回目の聖書体験。今回は笠岡の白石島で海や山の自然に触れ、笠岡教会で本場のイタリア料理を共に食べ、祈り分かち合いをしました。訪れた白石島は天気もよく綺麗な海に癒やされました。聖書の中



参加者一同 (白石島にて)

では湖の向こう岸へ渡るとき、イエス様が湖を鎮めてくださる場面があります。向こう岸に渡るとき、様々な大変なことが起こったとしても、イエス様がともにいてくださることを感じ、信じていることが大切だと学びました。また今回は9人の参加でしたが、この企画で初めて顔を合わせる青年も

いました。初めてで最初はぎこちないところもあったけれど、体験を通して打ち解けることができました。改めて食事や祈りを共に過ごすことの重要性を感じ、今後も積極的に取り入れていきたいと考えています。最後にご協力いただいた笠岡教会のジャン神父様方に感謝申し上げます。

2024年 司祭・修道者のプラチナ祝・ダイヤモンド祝

◆プラチナ祝70周年◆

《援助マリア修道会》福山修道院

Sr.大木 敦子 1954年3月25日 入会

◆ダイヤモンド祝60周年◆

《広島教区》

Fr.深堀 升治 1964年3月20日 叙階

《援助マリア修道会》福山修道院

Sr.曳野 幸枝 1964年6月7日 入会

Sr.斎藤 高子 1964年6月7日 入会

Sr.笹木 英子 1964年6月7日 入会

《ナミュール・ノートルダム修道女会》

東広島修道院

Sr.佐藤 良子 1964年4月3日 入会

青少年の活動

サビフェス2024

年明けより、目指せ参加者200人！と告知をしてきた、広島ユースデー（HYD）。度々の調整を経て、この度正式に、山口教会での開催が決定致しました！



『頂きます』

広島司教館

全 東黙 神父

名は「Xavier Fiesta 2024」（サビエル・フェスタ・ニゼロニヨシ）と名付けました。略して、サビフェス！老若男女、信者・未信者関係なくどなたでもご参加いただけるようなマルシェイベントを計画中です。祈りのプログラムもごさいますので、青年に限らず、多くの皆さまにお越しいただけることを願っております。

本企画は、2021年に教皇庁より発布された「部分教会（教区）における世界青年の日開催のための司牧指針」を受け、計画がスタートしました。コロナ禍を経て、益々、教会における若者の不在が叫ばれています。そんな今だからこそ、祈りの場としてはもちろん、集いの場

憩いの場としての教会を多くの方に体験いただき、普段は制約のある教会を身近に感じていただくきっかけになればと思っております。

また、昨年のWYDRISポ大会に参加した際には、「カトリックの行事に多くの若者が集う」という状況を目の当たりにし、大きな喜びを感じました。サビフェスの開

催をとおして、広島教区の青年たちにも、同じような体験を味わってもらえたら嬉しいです。

アルフレッド神父様をはじめ、山口教会の皆さまには、既にたくさんのご協力をいただき、ありがとうございます。

HYD実行委員会・青年スタッフは、引き続き大募集中です。当日一緒にサビフェスを盛り上げましょう！ご興味のある方は青年活動企画室までご連絡ください。

ひまわり

<121>

私は皆さんとミサを捧げたいです。カトリックの信者としてミサを行うということは何でしょうか？

まさに我々の中に聖体を食べることで、神様が私たちにおっしゃいました。「私の中にとどまりなさい。私もあなた方の中にとどまる」（ヨハネ15・4）私が主を食べ、私の中に仕えるように、主も私たちを食べながら私たちをあら

なた方の中に置きます。私たちが聖体を食べることは、神様が私を召し上がるということもあります。

しかし、多くの聖人は、単に聖体を口で食べるだけではなく、完全なミサが行われるには十分だと考えました。聖体を食べるといことは、相手のすべてを食べることです。実際、神様は旧約聖書の祭祀儀式を通じてこれを見せてくださいました。自分自身を捧げることができなかった人々は、自分の代わりになるような生け贄を捧げました。そして、その供え物として祭

祀に参加した人たち全員と神様も一緒に食事をします。

この時、神様は何を召し上がったのでしょうか？ 神様が私を召し上がる時、私の良い部分だけ召し上がったのではありませんでした。人が食べられない血、内臓とその中に入っている糞、そして皮と骨まで受け取って召し上がりました。

そんな神様は今、ミサの中で誰を通して私たちの身体を召し上がっていらっしゃるのでしょうか？ まさに私の隣にいる兄弟です。聖体というのは主の体を意味し、主の体はまさに教会です。聖体を食べるといことは、教会でありながら同時に主の体である、私のそばにいる兄弟を食べるといことも意味し

ます。血まみれで臭くて硬く、どうしても飲み込みにくい私を教会の私の兄弟が食べてくれるので、初めて私は主の中に留まることができるようになるのです。それと同時に、私も兄弟の良さもいやなことにも忍耐して飲み込み、聖体を私の中に入れます。

これこそ聖体を完全に食べることです。

そういう意味で、私は信者の皆さんと一緒に日々ミサを行いたいと思います。不十分な私の全てを受け入れて食べて下さる皆さんを通じて神様の慈しみに満ちあふれ、私もまた皆さんを食べながら神様の愛に満たされたいです。

そのミサの神秘を「今ここに」もう少し引き寄せておきたいです。

HYD 企画
Xavier Fiesta 2024
—主催 HYD 実行委員会—

日程	11月4日(月・祝)
会場	山口サビエル記念聖堂
11:00~	マルシェスタート (*売切次第、終了)
16:00~	祈りのプログラム

*当日、駐車スペースはございません。近隣のパーキングをご利用ください。

hsjc555@gmail.com
(青年活動企画室 益田)



8月5日の最後は、テゼの祈り。今年は平和公園の供養塔前にて祈りを捧げます。18時半より、皆様ともにお祈りいたしましょう。